

節 目

栗原尚子

今、大学は「変革」の時代である。これまでもお茶の水女子大学では大学のレベルでは、「女子大学」としての現代における存在理由をめぐって、学部レベルでは将来のあり方をめぐって討議が繰り返されてきた。現実の進行は早く、今年度から大学教育において従来の一般教育がなくなり、お茶の水女子大学ではコア科目として再生された。それに伴うカリキュラム改正で、一般教育の「地理学」は「地域研究」となった。これからは、個別の学問分野としての「地理学」の教育における制度的な存続も討議の対象となる。こうして原稿をワープロでたたいていても、「地理学」が一度の変換で出てこない現実には、「地理学」がおかれている状況の一端を反映している。

このような、大学・学部の節目に、浅海重夫先生、式正英先生に続いて、17年余りにわたって地理学科における研究・教育に力を尽くされた井内昇先生がこの3月に退官されることとなった。

私と井内先生との出会いは、お茶の水女子大学に勤めるようになってからである。数えきれない会話が成されたが、その中でも印象に残るのは、「栗原さんの専門とは一体なにか」と聞かれることである。アッチコッチに首を突っ込み正体不透明に見えるだろうなあと質問に答える前に、何時も質問自体に納得してしまうことが多い。井内先生が去られた後は、自分で折りに触れて発することになる質問だろうと思う。

井内先生が学生の名前を覚える早さはよく知られている。入学式の1週間後、しばらく担当されていた「地理学概説」の講義で、すでに学生の顔

と名前と出身校が一致している。言われた学生のほうがびっくりしたという話を聞いている。この至芸を受け継ぐのはちょっと大変である。私などかなり気合を入れて覚えても、長い休みが間に入ると全く元の木阿弥ということが度々であるからである。他方、「地理学概説」を引き継いだ時の経緯もおそろしいものであった。夢と希望を抱いて地理学を勉強しようとして入学してきた学生に、半年後、失意と絶望を植えつけるかも知れないのである。学生が転学科などと言ってきたら、その責任の一端を問われかねない。平成5年度からの地理学科のカリキュラム改正で、当講義は、自然地理学と人文地理学のそれぞれの専門分野に引きつけた内容で、複数の教師による講義となって肩の荷を一部おろした。

人文地理学講座直属の上司として、苦言を呈さざるを得ない立場に時として立たせてしまったこともあり、内容以上にそこに至った経緯を反省した。それでも、口に出さずに随分かばって下さったと思い、改めて感謝している。いつも遅くまで教室で仕事をなさっていた先生が去られるのは寂しいが、これからも元気に活躍くださること祈念しております。「都市地理学」の最終回の講義で「都市が熟成するには時間がかかる」という言は、多くのことを示唆していると思う。その後、教室で「人間も同じです」とおっしゃられたが、その心境に私が達するまでにはまだ相当の時間がかかる。むしろ、最後まで熟成せずに悪あがきする結果になりそうである。

(16回生)